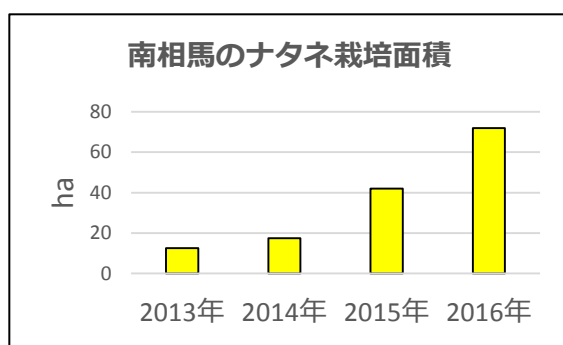


福島原発事故から6年が経過した。放射能汚染がもたらす人々の生活への影響は今も続いている。8万人を超える人々が故郷を追われたまま6年目の春を迎えるが、政府はこの3月をもって年間20mSv以下の地域を規制解除し、強制的に避難者を帰還させようとしているが、これは一般住民を原発労働者と同じ環境で生活させるという暴挙である。一方、私たちはチェルノブイリの経験をもとに、汚染地域に住み続けている人々のために、放射能を測定して汚染マップを作り、野菜や土壌の放射能測定サービスを地域の人々と一緒にやってきた。外部被曝と内部被曝を低減させるためである。崩壊した農業を立て直すために南相馬で始めた「菜の花プロジェクト」もその一環である。今、その成果は大きく花を開こうとしている。4月22日、23日は南相馬で「全国菜の花サミット」が開催され、状況を全国に発信する。多くの皆様の参加をお願いしたい。

菜の花プロジェクトのルーツ

私たちがウクライナのナロジチ地区で2007年から始めた「菜の花pJ」の成果は皮肉にも福島で花開くことになった。最大の理由はなたね油が放射能で汚染しない、という発見である。植物は土壌から放射能を吸収し汚染するが、放射能は細胞の中でも水溶性であり、油をとると放射能（セシウムもストロンチウムも）はすべて水分を含む油粕に移行し油には全く含まれない。これまでの分析では検出限界0.02Bq/Kgでも検出されない。同様の事は大豆油、ひまわり油、エゴマ油でも証明されている。即ち、植物油は原理的に汚染しないのである。チェルノブイリでのこうした成果を踏まえ、南相馬の農家の人々が2013年からなたね栽培を始めた。2013年度には12.5haだった栽培面積が2016年度は72haにまで拡大した。生産した菜種油は相馬農業高校の生徒さんたちの協力ですでに商品化され「油菜ちゃん」と命名され、油菜ちゃんを原料にしたマヨネーズと石鹸も市販されている。今後、ドレッシングとスキンケア・クリーム（菜の花バーム）も販売予定である。さらなる商品開発を進め農家が自立して生きて行ける道を開く。



バイオガス発電が開く未来

以前にも書いたが、汚染した油粕やその他のバイオマスは、メタン発酵でバイオガスを作り、バイオガス発電を行ってエネルギー自給につなげる予定である。今年度はまず南相馬に搾油工場を建設する。なたね栽培面積の増加とともに、搾油工場やバイオガス発電も地域の雇用を生む。日本国内ではバイオガス発電はあまり馴染みがないが、チェルノブイリ後に脱原発を決めたドイツでは当たり前の発電システムで、現在全国に5000基を超えるバイオガス発電所がある。雇用も再生可能エネルギーが原発を超えた。また、アメリカのPCメーカー、アップル社はノースカロライナ州に全米のデータセンターを建設したがその自家発電はバイオガスと太陽光で賄われている。バイオガス発電は世界の大きな流れである。(2017年3月23日 河田)